最終報告

内閣府　地域社会雇用創造事業　地域密着型インターンシップ研修　特定非営利活動法人素材広場
第８期インターン生　なつめ

１．目的

私は現在就職活動を行っている。そこで、今回の地域密着型インターンシップに参加するにあたっては、自分の進路の方向性をより明確にしたいという目標を掲げた。

具体的には、以下の点について実際の仕事に携わることで検証したいと考えた。

・伝統工芸、中でも漆器に非常に興味があるが、そのどこに魅力を感じているのか。
　また、今後伝統工芸とどのように向き合って行きたいのか（仕事として・消費者として・その他）。仕事としては、作り手と問屋の他にどのような仕事があるのか。
・食品業界に関心があるが、実際に業務に携わったことはない。そのため、自分の適性と合致しているのかどうかがわからない。
・地元が好きで福島で就職したいと考えているが、その明確な理由をはっきりさせたい。

本報告では、実際に様々な業務を経験する中で上記の点について感じたこと・考えたことを述べる。

２．研修内容

研修では、伝統工芸振興事業を行っている株式会社明天でのインターンが中心となった。前半は会津本郷せと市に向けての準備、後半は 9 月のモニターツアーで行う漆器を使ったビュッフェの準備が主な研修内容であった。

２-１.『会津本郷せと市 2011』に向けての準備

（１）　『会津本郷せと市』とは

会津本郷せと市（以後、せと市）とは、会津美里町瀬戸町通りで開かれる陶磁器の市のことである。8 月の第一日曜日、午前 4 時から行われる。通り沿いに多数の店が出され、陶磁器を中心に農産物や民芸品などが通常より安価で販売される。

（２）　せと市における明天の新たな取り組み

せと市をより他地域の人にも知ってもらい盛り上げるため、今年は明天が協力して新たな取り組みを行った。具体的な内容は以下の通りである。

・広報活動
　アナログ：チラシ・DM のデザイン一新。チラシ類の積極的な配布（合計 100 ヵ所）。今年度版の当日配布マップの作成。
　デジタル：プロモーション動画作成・公開。SNS サイト(Facebook、Twitter、mixi)利用。
・外国人向け対応：会津に住む外国人を対象とした英文広報（『Aizu Pottery Market!』）。
・新規公募枠の設定
・せと市当日のイベント企画：『せと市にょろにょろねんどのばし大会』
・せと市出店プレートの作成・配布（本郷中学校・陶芸部生徒作成）。
・出店者を対象としたアンケートの実施。

図１　せと市にょろにょろねんどのばし大会

図２　せと市・チラシ

図３　せと市・DM

（3）　作業内容

（2）で述べた取り組みのうち、実際に私が関わった作業は以下の通りである。

・出店者を対象としたアンケート作成。
・各地域の観光協会への資料送付（送り状作成、宛名書き）。
・せと市で使用する備品の作成（看板、イベント内容の説明ボード、受付で使用する番号札）。
・イベントの運営補助
・窯元・店舗の訪問（イベント景品の受け取りを兼ねた見学）。
　Irori
　樹の音工房
　流紋焼
　会津美里町本郷インフォメーションセンター、いわたて
　閑山窯
　宗像窯
　酔月窯
　鳳山窯
・出店者アンケート・広報アンケートの集計

図 4　樹の音工房

（4）　気づき・考察

・せと市について

せと市は午前 4 時開始ということで、人が来るのだろうかと疑問に思っていた。しかし、4 時の開始とともにお客さんが入り始め、6 時頃にはかなりの人出となった。私はせと市に地元のお祭りというイメージを持っていたため、驚いた。また、出店なさった方の中には県外からの方も多く、さらに出店経験がある方が少なくなかったことも意外だった。

私がお手伝いをさせていただいた当日のイベントにも、多くの人が参加してくれた。粘土をのばすという内容だったため大人は参加するだろうかと思ったのだが、子どもの騒ぐ声を聴きつけて大人も集まり始め、その内やってみたくなって参加するという人が多かった。人の声が聞こえる場所には、人が集まりやすいのだろうかと思った。従って、司会の方と参加者の方との会話にも集客効果があったのではないかと思う。いかに競技参加者に盛り上がってもらうかがポイントだと感じた。

せと市の開催時間は早朝から 8 時間あるため、ずっといるお客さんは飽きることもあるかと思う。その点、やはり今回のようなイベントは必要だと感じた。

せと市に初めて参加して感じたことは、震災があった割には賑わっているようだということであった。しかし、窯元さんのお話によると以前はさらに人出が多かったらしい。その頃は、宿屋さんなどが箱買いをして行き、個人のお客さんも多かったため当日の対応に非常に忙しかったそうである。年々客足は減少しているとのことだった。

だが、今回は昨年よりは売り上げがよく、お客さんも明るかったとの声も聞いた。また、空き時間に見て回ったところ、若い人が多く見受けられた。そのため、今後も広報面などに力を入れていけば、さらなる盛り上がりも期待できるのではないかと思った。

・本郷焼について

今までは、伝統工芸といっても漆器を中心に見て回ることが多かった。しかし、せと市に参加するにあたり、初めて焼物に焦点を合わせて活動した。同じ「会津の伝統工芸」というくくりの中でも漆器とはまた違った業界が存在していることを知った。

本郷焼の場合、以前は漆器と同様、問屋さんからの注文を受けて作るという形だったらしい。しかし、一度売上が落ち込んだ時、窯元さんが自ら売るようになったそうである。焼き物の場合、整形から焼成までの全工程を一つの窯元で完結させることが可能である。そのため、各窯元で独自に製造から販売までを行うようになったそうである。

２-２．漆器職人の工房訪問―観光モニターツアーに向けての準備。

素材広場が今年の 9 月、東京からメディア関係者を呼び、会津をアピールする観光モニターツアーを行う。その中で会津の食材を使ったビュッフェスタイルのバイキングが行われるが、その際会津漆器を使用する予定である。使用する漆器は、會'sNEXT という会津塗りの職人が構成する研究会の会員の方々が製作したものである。

今回のビュッフェでは、漆器を食器としてだけではなく、テーブルプレートなどの会場全体のデザインに使用することとなっている。そのため、漆器職人の方たちの元を訪問し、普段商品として表に出さないようなもの（道具、製作過程のものなど）を蔵から探させていただいた。

その際、工房も見学させていただき、会津漆器業界の状況などについてもお聞きした。

（１）　工房訪問・見学

■三浦圭一さん(三浦木工所)―木地師
■荒井勝祐さん(丸祐製作所)―木地師
■舟窪勇さん(うるしの杜　工房舟窪)―塗り師
■儀同哲夫さん(儀同漆器工房)―塗り師
■吉井信公さん(大吉屋)―塗り師
■宮田幸男さん―塗り師

図 5　荒井勝祐さん（木地師）

図 6　舟窪　勇さん（塗り師）

（２）　気づき・考察

今回の研修では、当初の予定では伝統工芸と食関係の仕事を同量程度やる予定であったが、伝統工芸関係の仕事の割合の方が多くなった。そうした中で、元々知っていた伝統工芸産業の実情について再認識すると共に、その状況に対して行動を起こしている人たちの活動について知ることができた。

その中で感じたことは、やはり生産者と消費者の間を取り持つ人が必要だということと、その二者の間により直接的な交流がほしいということである。

私は昨年の夏、会津若松にある漆器の訓練校と職人さん（塗り師１名、蒔絵師１名）の元を訪問し、漆器産業の現状についてお話を伺った。

会津の漆器は分業化が進んでいる点が特徴で、問屋が注文を木地師・塗り師・蒔絵師に振り分け、出来上がった商品を問屋から販売するという仕組みになっている。昔は注文が多かったためそれで産業が成り立っていたのだが、現在、漆器の需要は減少傾向にある。そのため、職人の人たちには仕事が来なくなり、これまで商品を売るということをしたこともなかったため自分たちでは売ることもできず、仕事として成り立たなくなるケースが増えた。したがって、職人の数も減少し、残った職人の人たちも後継者を育てるほどの余裕はなく、技術の継承も難しくなってしまった。

私はこの状況を知り、今後は消費者と生産者の方をつなぐ役割をする人が必要だと思った。そうしたところ、明天がまさにそれを事業として行っているということを知った。また、素材広場も食の観点から伝統工芸も含めた会津全体の振興事業を進めているということであった。

そうした方たちと実際の業務に携わり、また何名かの職人さんのお話を伺う中で、消費者と生産者が直に関わる必要性をさらに強く感じた。

最近「漆器」と称されて売られている商品の中には、実際は漆が塗られていないものもあるそうである。食器洗い機対応のものや電子レンジ使用可といったものがそうであり、そうした使用に耐え得る漆のように見える塗料を使用しているらしい。そのため、会津のきちんと漆を塗った漆器を、「漆器」ではなく「会津塗り」という名前で販売した方がいいのではないかという話もある、ということを塗り師さんにお聞きした。

確かに、漆の良さがそれらしい見た目やそのデザイン性だけであるのなら、本物の漆である必要はないのかもしれない。では、本当の漆を塗った製品の良さはどこにあるのかという点を疑問に思った。

その点に関して明確な答えは出ていないが、明天の社長である貝沼さんがおっしゃっていた「手をかける」という付加価値は答えの一つになるのではないかと考えた。

図７　宮田幸男さん（塗り師）

今は、どこでも手軽にものが手に入る時代である。しかし、その反面それが一体どのような素性をもったものであるのかははっきり知らないことが多い。最近では、特に食品において消費者が安全性の問題からその点を意識するようになってきた。また、大量生産・大量消費社会に疑問を抱く人も増えてきていることから、「量より質」といった考え方に意向してきていることを感じる。

そうした中で、手作業で手間暇をかけて作られる漆器は、丈夫であり安全性も高い商品だということができる。その点を消費者の方にもっと知ってもらえば、使おうと考える人も増えるのではないか。その手段の一つとして、職人の方に直に会ってお喋りをしてもらい、可能であれば工房を見てどのように作られているものなのかを見てもらうのが一番良いと考えた。

また、職人さんの工房を訪問してみると、みなさんとても快くお話をしてくださり、またものづくりに対して遊び心があるということに気づいた。

図８　三浦圭一さん（右）

工房を見学に行くと、従来の漆器のイメージにもあるような重箱やお椀はもちろん、それ以外にも試しに作ってみたという市松模様のような色合いの重箱や巨大な盆を見せてくださる方もいた。また、今までの型にはまった商品では売れないといって、他素材との組み合わせ等自ら工夫されている方もいた。そうした人たちと消費者側が話をすることで新たなアイディアが生まれることもあるだろうし、それが商品化につながれば、生産者にも消費者にもメリットが生まれる。

また、職人さんと関わりを持ってもらうことで、漆器を通してその人たちの存在を感じてもらうことができるだろう。作った人のことが意識にあれば、漆器にさらに愛着が湧くのではないか。

昨年、会津地方で行われた「漆の芸術祭」というイベントでは、漆カフェという職人さんと一般の方が話す場が設けられたらしい。仕事として漆に関わる機会のない人にとっては、普段漆器に触れることすら少ないのではないかと思う。しかし、かといっていきなり工房を訪問するのも気が引けるだろう。そうした人たちにとっても、イベントという形からなら敷居の高さを感じずに入っていきやすいのではないかと思った。

生産・販売側の人と一般の人との間の隔たりをなくすことが必要だと感じた。

図 9　重箱

図 10　片口、椀など（紙に漆が塗られている）

図 11　巨大な盆

２-３．山際食彩工房

山際食彩工房は、地産地消の食づくりに励んでおられる山際博美さんが経営する施設である。レトルト食品や漬物などの加工食品の開発・製造の他、メニューの企画なども手掛けている。

私が実際に作業をさせていただいたのは 2 日間であった。

（1）　作業内容

・桃のコンポート・ピクルス作り（計量、真空パック、オーブンでの加熱）
・ピュレ用のなすを切る作業
・9 月の観光モニターツアーのリハーサル（バイキングとそれについての意見交換会）―明天、會'sNEXT と共同の取り組み。
・事務作業（資料送付の準備、パソコンでの名刺情報入力）

（2）　気づき・考察

短期間の研修だったため、本当に「体験」という感じであった。しかし、やはりものを作ることの楽しさはあるということを感じた。食は生活の根幹を成すものであり、それを人に喜んでもらえる瞬間を想像

しやすいからかと思う。
　また、料理だけではなく、事務作業という裏方の裏方も必要ということを身をもって知ることができた。

図 12　山際博美さん

図 13　バイキングの様子①

図 14　バイキングの様子②

２-４．その他（フィールドワーク等）

　上記の他にも、以下の施設・土地を訪問した。
□いわき訪問：ニイダヤ・賀澤さん（お話を聞く）
□あいづまるごとネット・パネルディスカッション見学（『会津の伝統工芸と食の融合を考える～会津からの復興を見据えて～』）
□東山温泉お湯かけ祭り・盆踊り
□フィールドワーク
・末廣酒造株式会社　嘉永蔵
・福島県立博物館
・七日町散策
・地元（伊達市）
・大内宿

　これらの訪問を通して感じたのは、やはり震災の影響である。家が流されたところもあれば、客足が減り、経営に実害が出ている土地もあった。また、実害はなくとも放射線の影響を気にしているところもあった。形は違えども、やはり福島県である限り何らかの形で被害があるということを実感した。同時に、同じ県内でも状況が異なることを実際に目で見ることで痛感した。被害状況の違いから、人どうしの付き合いに衝突が生まれるという話も多く聞いたが、無理はないことなのかもしれない。人にあたってしまう人たちの話を落ち着いて聴いてあげられる人が多くいるといいのかもしれないと思った。
　自分も福島県出身の人間であるが、他のインターン生や研修中に関わった様々な方たちとお話をしていると、全く原発事故の影響についての知識が不足していることを認識した。積極的に情報を得ようとしない限り、実情を知ることはできないということを学んだ。
　今後福島に戻りたいという思いがあるのなら、目を向けるよう意識をしなければならないと思った。

↑図 15　いわき・四倉の海岸

図 16　大内宿（→）

３．考察・まとめ

今回の研修全体を通して感じたことは、実際に現場に行き、そこを見て話を聴くことによって感じ方が変わるということである。

現場に行くことによって、新たな知識を得ることはもちろん、自分がどの程度そのことについて知っていたのか、あるいは知らなかったのかを実感することができた。動かずに考えるよりも、人の意見に触れることで考えが前進することもあるということを身をもって体験することができた。

今回の研修内容のメインとなった伝統工芸に関しては、仕事にしなければ関わることは難しいと思っていたが、イベントに参加したり職人さんの元を訪れたりすることでできることもあるかもしれないと感じた。

あまり自分の固定観念にとらわれず、考えたことを行動に移してみても良いのだということを学べたことが収穫だった。